

読書習慣の継続が将来の成功へ

1日に1時間以上本を読む小学生は、ある調査によると6人に1人くらいという結果が出たそうです。これまでは、国語が大好きだったと言う人は決して多数派ではありません。半数近くの人が、高校卒業までに国語を苦手と感じるようになり、そのうちの半数はすでに小学校の時点でそう感じるようになっていわれています。

読書に関してはさらに明確で、子供が本を読まなくなる境目は10歳です。この年齢は、子供の社会性がぐっと高まる時期です。例えば、ニュースや大人が話していることを聞き入っては、「税金って何？」などと聞いてくるようになります。社会に目が開かれたと言う点では良いことですが、反面、社会にあふれる良くないものも吸収する可能性が高まります。テレビやインターネット、今では子供が当たり前のように所有しているゲームやスマホなど、そうしたものを自由に扱えるようになると、読書が本当の意味で生活習慣として根付いている子供以外は、ほぼその辺から本を読まなくなります。

小さい頃から中学受験を視野に入れ、見事に合格を果たした子ども、塾の課題図書と言うノルマがなくなったとたん、本には見向きもしなくなると言うケースも少なくないようです。これまで我慢してきたんだからと、ネットやスマホし放題の生活にどっぷりつかってしまうのです。そうならないために、10歳までが本好きにするチャンスの期間です。最近は学校の朝読効果もあり、全く本を読まないと言う子は減ってきていますが、学校外で日常的に読書している子供はどれくらいいるのでしょうか。統計によれば、読書時間が1日に30分以上ある小学生は3人に1人。1時間以上ある子は6人に1人となっています。中学生になるとその割合はさらに減ります。高校生にとっては1ヵ月に一冊も読まなかったと言う生徒が50%以上に上ります。読書家と言う事だけで既に少数派なのです。それだけ周囲から頭1つ抜き出ていると言うことです。

仮に今、幼児のお子さんと、まだ字が書けず、友達が書けていたとしても、小学生のお子さんと学校の成績が上位でなくても、勉強が本当に必要となり、本人にスイッチが入ったときたちまち伸びていきます。大人になって成功する人は、みんな読書家です。言うまでもなく、本は様々な知識や知恵を与えてくれます。



人ひとりができる経験には限りがあります。それを補ってくれるのが本です。優秀な人はみんな読書家ですが、大企業の社長さんや一代で事業を成功させた実業家など、自分の能力を最大限に発揮して生きておられる方々もほとんどが読書家です。本との対話によって自分自身の幅を広げ、思考を深めていきます。子供も同じです。本によって知らないことを知ることができる。さらに好奇心を刺激され、どんどん知識を深めていける。いろいろなものの考え方を学び、思考力を鍛えられる。こうした訓練を積んだ子が、大人になってから成功していくことが多いようです。

「読み聞かせ」は最小かつ重要な読書経験

読書の始まりは、音を聞かせることが目的です。子供にとって読書経験の始まりは親による絵本の読み聞かせです。これは何歳からでも早ければ早いほど結構です。「言葉を話せない乳児の頃からやって効果あるのですか」などと疑問をもたれることがあると思いますが、言葉を話せない乳児だからこそやる意味があります。さて読み聞かせという言葉、これをご存じない方はいらっしゃるかもしれませんね。ではこの言葉の意味を正確に説明できるでしょうか。絵本を読み聞かせると言う事はどういうことでしょうか。「物語を読んで聞かせること」「絵を楽しむこと」など、もちろんそれも正解ではありますが、大正解とは言えません。絵本の読み聞かせなのですが、実は違うのです。情操教育に役立てるため、これも間違いではありませんが、第一目的とは異なります。では絵本を読み聞かせると言う事はどういうことか。それは、音を聞かせることです。絵本に書かれている1字1字のすべてを子供の耳から体内へ授乳させるようなイメージで読んで聞かせること。これが読み聞かせです。



本は、すらすら読むではいけないようです。皆さんこれまでどんなふうに絵本を読んできましたか。なんとなくではないですか。では、まず次の1文を子供に読んであげるつもりで、声に出してみてください。

ある日のこと おじいさんは山へ芝刈りに行き おばあさんは庭で洗濯をしていました

すらすらとよどみなく読んだ方がほとんどだと思います。これからお話する読み聞かせの方法は、いわゆる朗読とは違うことをまず頭に入れておいてください。また、女性は感受性が豊かです。感情を込めたり声音を変えたりすることで、絵本の世界をよりリアルに子供に伝えようとしますが、それに神経を使う必要はありません。

幼児向けの絵本や幼年童話から、古典から現代に至る文芸作品まで、洋の東西を問わず、また、ジャンルを問わず、お母さん向けの音読会やこれから受験を目指す中学生や高校生、そして、もっと教養を深めたいと考えている大学生や社会人はとにかく読みまくることで。

もう一度、口をしっかりと開けて意識して文字を1音1音はつきり読むことで、音として注入していきます。ためしにやってみてください。

あ、る、ひ、の、こ、と お、じ、い、さ、ん、は、や、ま、へ、し、ば、か、り、に、い、き お、ば、あ、さ、ん、は、に、わ、で、せ、ん、た、く、を、し、て、い、ま、し、た

すべての音をしっかりと同じ強さで発音します。棒読のお経みたいに聞こえるかもしれませんが、それでいいのです。絵本は音を聞かせるための本です。最も大事なのはすべての音子供に聞こえるように読むこと。これを「1音1音はつきり読み」と呼ばれています。「1音1音はつきり読み」で子供はじっと耳をすませます。